

---

---

# 「令和5年度 飼料用米多収日本一」 受賞者の取組概要

---

---

## 【単位収量の部】

農林水産大臣賞

1 山口 勝利 (北海道)

農産局長賞

2 海地 博志 (山口県)

全国農業協同組合中央会会長賞

3 古川 久夫 (岩手県)

全国農業協同組合連合会会長賞

4 小針 暢芳 (福島県)

協同組合日本飼料工業会会長賞

5 樋熊 学 (秋田県)

日本農業新聞会長賞

6 高杉 伸悦 (青森県)

## 【地域の平均単収からの増収の部】

農林水産大臣賞

7 熊谷 聡 (福島県)

農産局長賞

8 農事組合法人ふながわ (富山県)

全国農業協同組合中央会会長賞

9 高野 博文 高野 森夫 (福島県)

全国農業協同組合連合会会長賞

10 櫻井 博 (茨城県)

協同組合日本飼料工業会会長賞

11 牟田 基治 (佐賀県)

日本農業新聞会長賞

12 梅村 貢司 (愛知県)

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
きたげんき	2.1ha	974kg/10a	385kg/10a(589kg/10a) <sup>※</sup>

※作柄調整後の地域の平均単収

### 【経営概況】

- 家族経営(本人、妻)
- 米作のみの専業農家
- 収量向上と生産コストの低減を両立させる手法に取り組む。

### 【作付品目】

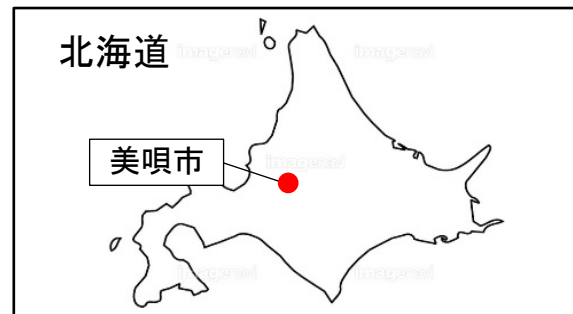
- 主食用米 18.5ha  
ななつぼし、ゆめぴりか、おぼろづき、  
さんさんまる(乾田直播)
- 飼料用米 2.1ha  
きたげんき

### 【取組のきっかけ】

- 多収品種でありながら耐倒伏性・耐冷性に優れ、管内に採種圃場が設定されていることから種子の供給も容易であるため、「きたげんき」を選定。

### 【取組概要】

- 主食用米4品種と飼料用米を作付けしているが、収穫適期を逃さないよう作業競合が生じにくい品種構成にしている。特に「きたげんき」は多収を追求しているため、収穫適期判定(黄化率)を確認し収穫作業に進んでいる。
- 田植えでは、一番最初に飼料用米「きたげんき」から移植し、少しでも出穂期を早め登熟期間を確保する取組をしている。また、微生物資材である植物体内共生微生物(商品名:イネファイター)を育苗時に散布している。本商品の主成分は稲から発見された共生細菌(アゾスピリルム属 *Azospirillum* sp. 細菌)で、育苗時に散布し稲の植物体内に吸収・共生させるもので、稲の免疫力を高め、病害虫に対する抵抗力が高まるものとされている。
- 多収に向け、秋に稲わらを鋤込み、ケイカルを春と秋に分けて投入するとともに、基肥に暖効性肥料を使用することで秋まで肥料切れにならないように工夫している。病害虫防除には播種同時箱施用剤を使用し、本田は無人ヘリコプターによる防除、基幹防除は1回のみで、雑草防除は植代後の除草と初中期一発剤の除草とし、防除と除草の回数を減らして、省力化とコストの低減を図っている。



2 **かいち ひろし** 海地 博志 (山口県山口市)

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
北陸193号、みなちから、 夢あおば、オオナリ	3.3ha	812kg/10a	285kg/10a (527kg/10a) <sup>※</sup> <small>※作柄調整後の地域の平均単収</small>

**【経営概況】**

- 家族経営(本人と妻)、  
農繁期には従業員を期間雇用
- 近隣農家(3経営体)の乾燥・調製作業を  
受託

**【作付品目】**

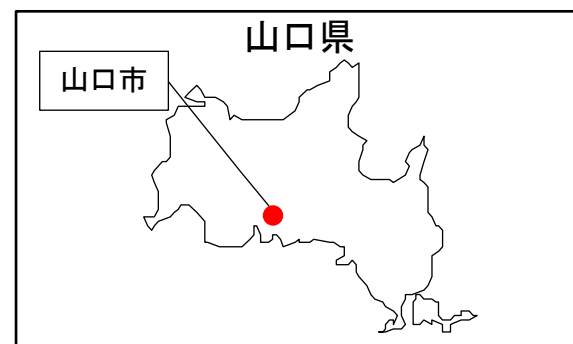
- 主食用米  
恋の予感、ヒノヒカリ、中生新千本 2.7ha
- 飼料用米(種子用を含む)  
北陸193号、みなちから等 5.4ha

**【取組のきっかけ】**

- 実需者の食の安全・安心へのこだわり、耕畜連携による持続可能な地域循環型農業のモデルづくりに共感するとともに、飼料用米取組による主食用米との作業分散や経営安定を期待して、平成22年産から本格的な飼料用米(当初は「モミロマン」)生産に取り組む。

**【取組概要】**

- 平成23年産から、より多収性で耐倒伏性に優れる「北陸193号」に変更。令和5年産は需要者からの要望もあり、「北陸193号」、「みなちから」、「夢あおば」及び「オオナリ」を作付けした。収穫期が遅い「北陸193号」を作付けることで、主食用米との作業分散や収穫等作業でのコンタミ防止が図られている。また、脱粒性が高いため、立毛乾燥を行わないことで裂果による脱粒を防止でき、株張りが良く草茎が固い部分を避け地上高30cmの部分刈り取ることで収穫時のコンバイン負荷を軽減。
- 生産コスト低減を図るため、①疎植栽培(地域の慣行60株/坪から50株/坪へ)により資材費・労働力を低減、②耕畜連携の取組(実需者から鶏糞堆肥の無償供給を受ける)と、基肥・追肥での安価な単肥(硫安・尿素)使用により資材費を低減、③病虫害防除剤の苗箱散布、除草剤の移植時同時散布により労働力を低減、④実需者へフレコン出荷することで包装容器代・運搬経費を低減、⑤機械整備を自ら行うことで長期的な機械の使用による設備費低減の取組を実施。
- 実需者と実需者に出荷する飼料用米生産者が連携し、生育診断等を実施する現地圃場視察会等を行うことにより、生産者同士が切磋琢磨し、単収向上を目指している。



3 ふるかわ ひさお 古川 久夫 (岩手県盛岡市玉山)

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
たわわっこ	2.9ha	788kg/10a	206kg/10a (582kg/10a) <sup>※</sup>

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営(本人と妻)。休日のみ息子も手伝う。
- 水稻を中心に、スイートコーンも作付け。

【作付品目】

- 主食用米 あきたこまち 1.3ha
- 飼料用米 たわわっこ 2.9ha
- スイートコーン 0.1ha

【取組のきっかけ】

- 稲作作業の省力化、経営の安定化を図るため、平成30年頃から取り組んでいる。

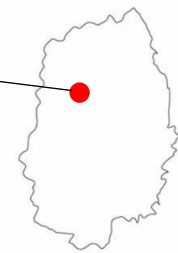
【取組概要】

- 令和2年まで作付けていた「つぶゆたか」よりも穂長、粒数が多く、多収が期待でき、耐倒伏性に優れる「たわわっこ」を令和3年から選定。
- 施肥管理は、①毎年、稲わらをすき込み、鶏ふん堆肥を1.8t/10aで施用し、②基肥は成分22-10-10(飼料用米専用肥料)45kg/10aを田植え前全層施肥で施用、③生育が悪いところのみ、追肥の成分17-0-17(NKC17号)約13kg/10aを動力散布機を使用して実施することで、多収を実現している。また、たわわっこの品種特性を考慮して、1株当たり6~7本(通常、3~5本)となるように田植えを行っている。
- 生産コスト低減を図るため、①半プール育苗(育苗ハウス内にビニールを敷いた上で、スプリンクラーを設置し散水)により水管理の時間短縮、②播種量を190g/箱まで密度をあげ、箱数を削減、③フレコン出荷し運搬経費等の削減等の取組を実施している。
- 病害虫防除については、4月下旬にナエファインフロアブル、5月下旬にワンリード箱粒剤を育苗箱に施用している。除草剤については、初中期一発剤として、豆つぶ剤(ベンケイ)を畦から投げ込みにより散布し、防除できなかったほ場には、中後期剤としてクリンチャーバスを散布している。



岩手県

盛岡市玉山





4 小針 暢芳 (福島県須賀川市)

こばり のぶよし

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
ふくひびき	2.0ha	760kg/10a	207kg/10a (553kg/10a) <sup>※</sup>

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営(本人、妻、父、母)
- 水稻を中心に、ハウス栽培できゅうりも作付け

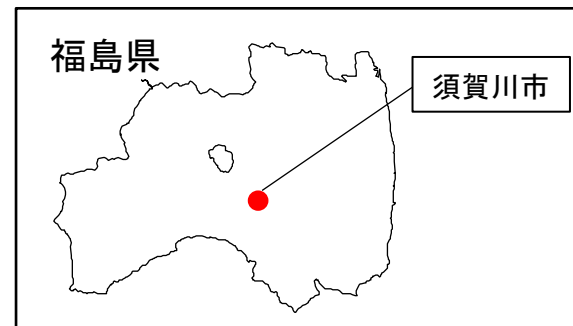
【作付品目】

- 主食用米 コシヒカリ 4.5ha
- 飼料用米 ふくひびき 2.0ha
- きゅうり(ハウス栽培) 0.02ha



【取組のきっかけ】

- 稲作作業の省力化、経営の安定化を図るため、令和3年産から取り組んでいる。



【取組概要】

- 多収が期待でき栽培しやすい「ふくひびき」を選定し、令和3年産から取り組んでいる。
- 施肥管理は、①毎年、稲わらをすき込み、②隔年で鶏ふん堆肥を15kg/10aで施用し、③基肥は成分25-10-10の肥料(ハイセラN25)30kg/10aを田植え前全層施肥で施用している。これらの肥培管理及び池の水を利用して湛水管理を実施していることで、追肥をせずとも多収を実現している。
- 生産コスト低減を図るため、①プール育苗により水管理の時間を短縮、②収穫前に水分値が16%前後になるまで立毛乾燥を行い、乾燥コストを抑制(主食用米との作業の分散も図れる。)、③飼料用米を作付け始めた令和3年から、フレコン出荷を実施している。これらの取組により、人数を増やすことなく、ハウスきゅうりの栽培管理も可能となっている。
- 病害虫防除については、箱処理剤(ツインキック)をイネドロオイムシの発生状況に合わせて50~70g/箱を施用している。除草剤については、田植え後1週間~10日を目安に湛水状態で1発処理剤(エンペラー豆つぶ)を畦から投げ込みにより散布している。

# 5 ひぐま まなぶ 樋熊 学 (秋田県南秋田郡大潟村)

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
ふくひびき	4.7ha	837kg/10a	285kg/10a (552kg/10a) <sup>※</sup>

※作柄調整後の地域の平均単収

## 【経営概況】

- 家族経営(本人及び息子)
- 水稻を中心に、トウモロコシ等の野菜も作付け。夏期に水稻の育苗ハウスを利用してトウモロコシ等の生産を行っている。

## 【作付品目】

- 主食用米 あきたこまち 4.1ha  
たつこもち 0.4ha
- 加工用米 たつこもち 4.3ha
- 飼料用米 ふくひびき 4.7ha
- 新市場開拓用米 あきたこまち 0.9ha
- トウモロコシ等 0.05ha

## 【取組のきっかけ】

- 経営の安定化が図られることを期待し、令和3年産から飼料用米生産に取り組んでいる。

## 【取組概要】

- 短稈で耐倒伏性に優れた穂重型の多収品種であり、加工用米として栽培経験のある「ふくひびき」を、令和3年から選定。
- 多収を実現するため、稲が持つ本来の分けつ力を引き出し、効率よく穂数を確保できる疎植栽培を実施し、肥培管理として、①稲わらをすき込み、②基肥は、高度化成肥料14-14-14(オール14)と育苗箱全量施肥(苗箱まかせ)し、③尿素:1.5kg/10aを追肥として2回(1回目は、活着後に無人ヘリコプター、2回目は、穂肥として流しこみ施肥により)施肥することで、多収を実現した。また、7月の豪雨と夏期の猛暑に見舞われたが、毎日の水管理や見回りで農作業時期を判断し、適期のタイミングで追肥を行ったことも多収につながった。
- 作業の省力化・生産コストの低減を図るため、①農閑期(3月頃)にもみ殻くん炭を作り、育苗用の土と混ぜることで育苗土の経費削減と育苗箱を軽量化、②50株/坪で疎植栽培を実施、③追肥は比較的安価な尿素を使用し、省力化技術で実施している。
- 病虫害防除については、立枯病、いもち病対策にはナエファイン、害虫防除にはヨーバルトップを育苗箱に施用している。雑草防除については、初期除草剤及び一発剤(流星)を、仲間3名で共同購入したラジコンホバークラフトを使用し、コスト削減を図っている。
- ①スマート農業技術(GPSアシスト田植え機)を導入したことで、結果的に肥料の重複施用をなくし、過剰な施肥を防止することができたほか、②通常より長期の中干しを適切に行うことでメタンガス発生を抑制でき、環境負荷を低減した飼料用米生産に取り組んだ。



## 秋田県

大潟村



6 たかすぎ しんえつ 高杉 伸悦 (青森県五所川原市)

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
ゆたかまる	3.7ha	780kg/10a	107kg/10a (673kg/10a) <sup>※</sup>

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営(本人)、繁忙期には親戚が手伝う。
- 近隣の飼料用米生産者と共に、収穫から販売までの作業を委託し効率化。

【作付品目】

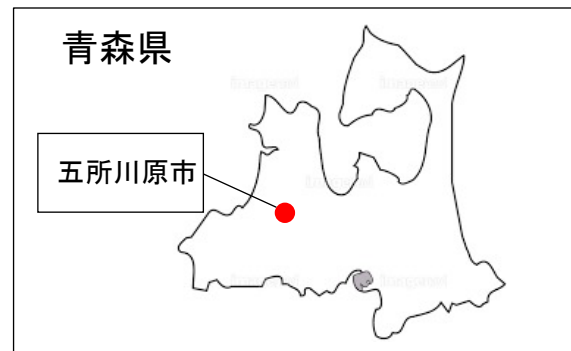
- 主食用米 まっしぐら 0.3ha
- 飼料用米 ゆたかまる 3.7ha
- 枝豆、とうもろこし 0.1ha

【取組のきっかけ】

- 食料自給率が低下する中、畜産物の飼料を国産化することで食の安全・安心につながる取組に共感し、平成28年産から取り組んでいる。

【取組概要】

- 協力して飼料用米生産をしている地域の中核的生産者と相談の上、耐倒伏性が強く収穫作業のし易い「ゆたかまる」を選定。
- 施肥管理は、①肥料成分の高い異なる肥料(らくしょう、ハイテツソ)を、どのほ場もN成分が12kg/10aとなるように散布し、肥料による生育等の違いを試験し、②生育が悪いところのみ動力散布機で追肥(ちょいまき)を1回行うことで、多収を実現している。
- 雑草防除は、代かき後に水を少なめに入れ除草剤(農将軍フロアブル)を使用した上で、落水せずにそのまま田植えを行い、田植え4日後に除草剤(トップガン)を機械などを使用せずに畦から投入している。
- 生産コスト低減を図るため、①折衷苗代での育苗で水管理の時間を短縮する、②60株/坪で疎植栽培をする、③乾燥・調整にフレコンを使用するなどコスト低減の取組を行っている法人に安価な委託費で収穫作業を委託する、等の取組を行っている。
- 種もみの浸種の際に、水槽用の循環ポンプを使用して酸素を種もみに与えるようにしており、育苗の際に芽揃いの成果が出ている。





7 くまがい さとし 熊谷 聡 (福島県須賀川市)

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
ふくひびき	3.7ha	852kg/10a	311kg/10a (541kg/10a) <sup>※</sup>

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営(本人、妻、臨時雇用2人)。
- 水稻を中心に、いんげん等の野菜も作付け。

【作付品目】

- 主食用米 3.2ha  
ひとめぼれ、コシヒカリ
- 飼料用米 ふくひびき 3.7ha
- いんげん、自家消費野菜 0.1ha

【取組のきっかけ】

- 稲作作業の省力化、経営の安定化を図るため、令和3年産から取り組んでいる。

【取組概要】

- 多収が期待でき耐倒伏性に優れる「ふくひびき」を、令和3年産から選定。
- 施肥管理は、①毎年、稲わらをすき込み、②隔年で鶏ふん堆肥45kg/10a(又は牛ふん堆肥)を施用し、③基肥は成分25-7-7の肥料(飼料用米向け一発肥料のお米のみかた)40kg/10aを田植え前全層施肥で施用し、④生育が悪いところのみ追肥を実施することで、多収を実現している。
- 生産コスト低減を図るため、①プール育苗により水管理の時間短縮、②播種量を300g/箱まで密度をあげ、箱数を削減、③収穫前に水分値が19%前後になるまで立毛乾燥を行い、乾燥コストを抑制、④フレコン出荷による運搬経費等の削減等の取組を実施している。
- 農機具メーカー(の指導員)とも相談の上、密苗の影響やふくひびきの品種特性を考慮して、1株当たり5~7本(通常、3~4本)、65株/10a(コシヒカリは50株/10a)となるように田植えを行っている。田植え時に、活着を促進させるため、稚苗用液肥源を少量粉状で育苗箱に散布している。
- 病害虫防除については、育苗箱(ツインターボ箱粒剤08)を施用している。除草剤については、初期剤として、農将軍フロアブルをトラクターで施用し、初中期一発剤として、田植え機でアツパレZ粒剤を田植え同時施用している。その後に生えてきた雑草は、田植え機にアタッチメントをつけ機械処理で確実に除草している。機械処理により、稲の根に酸素を供給でき生育がよくなるメリットもある。



福島県



須賀川市

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
やまだわら	6.1ha	836kg/10a	305kg/10a(531kg/10a) <sup>※</sup>

※作柄調整後の地域の平均単収

#### 【経営概況】

- 地域の若い担い手の問題提起を機会として設立された集落営農組織から始まり、平成19年に法人化して発足。
- 代表者: 由井 久也
- 組合員 [R5]: 32名

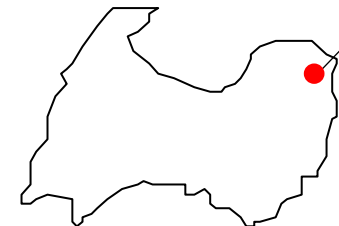
#### 【作付品目】

- 主食用米 32.5ha  
コシヒカリ、富富富、てんたかく
- 飼料用米 やまだわら 6.1ha
- 大豆 えんれいのそら 11.9ha



富山県

朝日町



#### 【取組のきっかけ】

- 平成27年に大区画ほ場整備(一筆1ha区画)をした際、飼料用米の作付けを勧められ、「やまだわら」の作付けを開始。倒伏しにくいことや作期分散が図れることが確認できたことから、種子生産体制の拡充にあわせて徐々に作付面積を拡大。

#### 【取組概要】

- ①主食用米の移植栽培、②主食用米の直播栽培、③飼料用米の順で収穫できるように作付けし、作期を分散。併せて、ほ場の水管理を徹底し、高単収を確保している。また、一部圃場で、密苗を試験導入し、箱数削減による育苗の省力化やコスト低減に取り組んでいる。
- 大区画ほ場の整備と飼料用米の団地化による効率化に加え、大区画ほ場に適した畦畔の傾斜が緩やかな耕作道(低段差緩傾斜耕作道)を整備して、大型機械の乗り入れやターンを容易にし、更なる効率化を実現している。
- 土づくりを基本とし、ケイ酸の他にリン酸、カリを加えた配合肥料(120kg/10a)、鶏糞(300kg/10a)を散布。また、コンポキヤスタ(肥料散布機)を導入して散布を効率化している。また、隣県の養鶏業者から輸送費負担のみで鶏ふんの提供を受け経費を削減している。
- 除草剤は、投込み式の大規模農家用製品を使用し、コストを低減。また、畦畔には芝を植えて畦畔除草の労力を軽減している。
- 平成29年からスマート農業の取組を開始。センサー搭載コンバインを活用し、翌年のほ場毎の栽培管理に活用している。また、オペレーターの労力軽減を図るため、令和4年度に自動操舵システムを既存の田植機に追加で導入している。

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
ふくひびき	16.1ha	741kg/10a	240kg/10a (501kg/10a) <sup>※</sup>

※作柄調整後の地域の平均単収

### 【経営概況】

- 家族経営(本人(子と親)と子の妻)
- 平成30年から徐々に飼料用米の作付面積を増やし、作業時期をずらして主食用米にも取り組む。

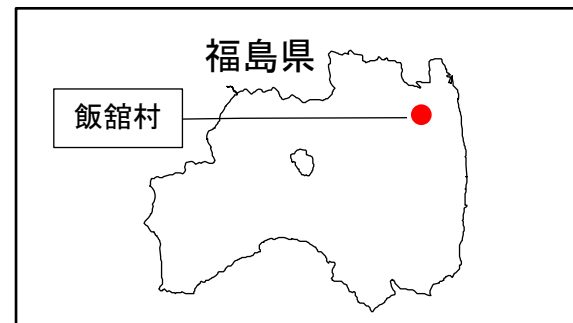
### 【作付品目】

- 主食用米 コシヒカリ 0.7ha
- 飼料用米 ふくひびき 16.1ha



### 【取組のきっかけ】

- 避難先との往復でも作業できるよう、省力化に取り組み、耐倒伏性と多収が期待できる「ふくひびき」を平成30年から作付け。



### 【取組概要】

- 耐倒伏性と多収性に優れる「ふくひびき」を、平成30年から選定。
- 平成30年1.1ha、令和元年4.1ha、令和2年6.3ha、令和3・4年10.5haと徐々に拡大し、令和5年からは農地中間管理機構から10年契約で借り受けた農地を含め16.1haでふくひびきを作付けていく予定。
- 施肥管理は、①毎年、稲わらをすき込み、②基肥は「コメコメー発30」45kg/10aを播種時同時側条施肥し、③追肥は背負い動力噴霧器を用いて、生育状況を見ながら「NK化成」7kg/10aを2～3回散布することで、多収を実現している。
- 作業の省力化・生産コストの低減を図るため、①鉄コーティング種子を購入し湛水直播、②自己所有のドローンで除草剤散布、③主食用米の収穫を先に行い、十分に水分値が下がってから飼料用米を収穫、④水管理は、田に高低差を設け上段から下段に流れるように管理、⑤自己所有の乾燥調製施設で調整しフレコン出荷等の取組を実施している。
- 病害虫防除については、①イネドロオウムシ防除の殺虫剤を播種時同時側条施用し、②ボデーガードプロ(粒剤)1kg/10aをドローンで散布することで、効率よく防除している。



品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
夢あおば	18.5ha	730kg/10a	203kg/10a(527kg/10a) <sup>※</sup>

※作柄調整後の地域の平均単収

#### 【経営概況】

- 正規雇用:1名(基本年間の作業は本人のみで行う。)
- 臨時雇用:4から5名(田植え、刈取り時期に家族(両親)や近所の人が手伝いに来る。)
- 栽培管理支援システムのザルビオを導入し、ヤンマーの農業機械と連携させて活用している。
- 株間に溝を切る水管理技術により高温障害を軽減しており、スマート農機と併せて近隣生産者へ情報発信・共有を行う。

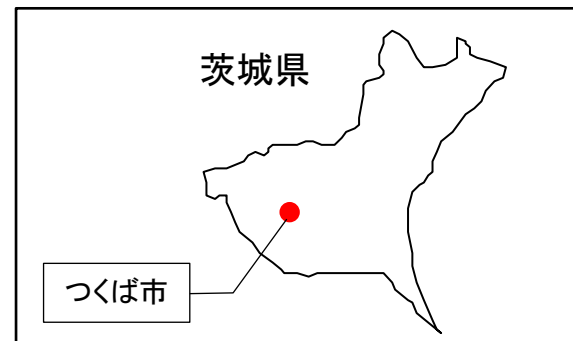
#### 【作付品目】

- 主食用米 コシヒカリ 3.8ha
- 飼料用米 夢あおば 18.5ha
- 芝 0.7ha
- 野菜(自家用) 0.1ha



#### 【取組のきっかけ】

- 市の助成等地域全体の利点を考慮し、近隣農家に呼びかけ団地化と飼料用米の作付けを進めた。
- 「夢あおば」は多収が期待できる上、県の奨励品種であり種子生産が行われていることから選択。



#### 【取組概要】

- 育苗箱当たり乾籾280gで密播することで箱数を抑え、ハウス育苗時の使用面積と労働時間を削減するだけでなく、移植時の10a当たり箱数を15~16枚から10枚弱まで削減し労力を軽減している。また、ドローンによる湛水直播を部分的に試行している。
- 土づくりのため刈取り後すぐに稲わらをすき込む他、鶏糞(ペレット)10a当たり5袋(75kg)をブロードキャスターにより施肥を行う。
- 「夢あおば」については作土深18cmと深めに耕起し、移植前は苗に弁当肥(窒素)を与え初期生育を確保している。基肥に「水稻専用一発肥料」、穂肥・実肥に「空散追肥306」をドローンで施用する。10aあたり窒素分が1~1.5kgになるよう散布している。ザルビオで衛星データを活用した可変施肥を実施し、品質の均一化、肥料使用量の軽減を図る。
- 病虫害防除と雑草防除もドローンで全面散布し省力化している。地域内圃場312ha分のドローン作業を請負い、地域に貢献している。
- 穂先を観察し登熟率85%を確認してから4~5日後に収穫することで登熟期間を確保しつつ、立毛乾燥による乾燥調製の燃料代削減を図る。
- 主食用米の乾燥調製後に飼料用米を収穫し作期分散で効率化している。直接取引せず全量をJAへ玄米でフレコン出荷しコスト低減している。



# 11 牟田 基治 (佐賀県三養基郡みやき町)

むた もとはる

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
ミズホチカラ	1.3ha	758kg/10a	215kg/10a (543kg/10a) <sup>※</sup>

※作柄調整後の地域の平均単収

## 【経営概況】

- 家族経営(本人、妻、娘婿の3名)
- コンバインや乾燥機を保有しており、全量を自家収穫・自家乾燥。
- 実需者に対し直接出荷。

## 【作付品目】

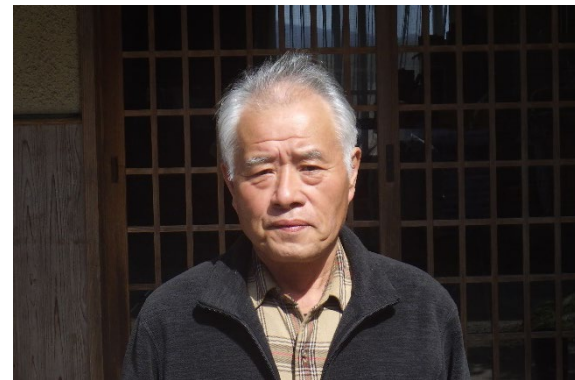
- 主食用米 さがびより等 7.2ha
- 飼料用米 ミズホチカラ 1.3ha
- 小麦 8.4ha ○ 裸麦 4.7ha
- 大豆 3.2ha

## 【取組のきっかけ】

- 実需者からの要望により、平成28年に飼料用米の取組を開始。現在に至るまで安定的な収量を確保している。

## 【取組概要】

- 耐倒伏性が強く、多収かつ栽培が容易なため、「ミズホチカラ」を作付けし続けている。晩生品種のため、主食用米との作期分散、労力分散が図られている。
- 生産コスト低減を図るため、下記事項に取り組んでいる。
  - ① プール育苗 ② 投げ込み式の除草剤を使用 ③ 田植え後の浅水管理でスクミリンゴガイ対策
  - ④ 地域の養鶏業者で飼料用米出荷先の実需者から、鶏糞を2万円/10tで購入
  - ⑤ コンバインや乾燥機を保有しており、全量を自家収穫・自家乾燥 ⑥ フレコン出荷
- 実需者と、年に数回、施肥のタイミング等の栽培管理について打合せを行い、生育状況の確認を行いながら管理しており、実需者ニーズを満たした品質のものを出荷している。
- 令和5年7月に娘婿(前職は食品製造メーカー、出身は非農家)が就農し、後継者を確保している。



品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
もみゆたか	7.8ha	690kg/10a	214kg/10a(476kg/10a)*

\*作柄調整後の地域の平均単収

## 【経営概況】

- 家族経営
- 地域の耕地の集積を進めており、水稲作を中心に取り組んでいる。

## 【作付品目】

- 主食用米
  - ミネアサヒ ほか 2.8ha
- 飼料用米(種子用を含む)
  - もみゆたか 7.8ha



## 愛知県



豊田市

## 【取組のきっかけ】

- 農地集約による規模拡大を機に、農業経営の安定化を図り需給調整に取り組むに当たり、安定した収入が見込める飼料用米に着目し、平成19年から実需者と契約を交わし生産に取り組んでいる。

## 【取組概要】

- 令和3年産から、多収性もある知事特認品種「もみゆたか」を選定し栽培に取り組んでいる。  
主食用米は「ミネアサヒ」で取り組んでおり、早生の「ミネアサヒ」の収穫後に晩生の「もみゆたか」の収穫を行うことで作期分散を図り、主食用米とのコンタミ防止を徹底している。
- ①飼料用米の作付けの団地化により生産コスト低減及び作業の省力化・効率化を図る、②田植えと同時に基肥、除草剤を散布することで作業の効率化とともに初期生育の向上を図る、③出荷にフレコンを使用し作業効率を高める等の取組みを行っている。
- 施肥管理は、①鶏ふん堆肥を利用するとともに、②基肥(化成肥料(14-14-14))を導入している。
- 実需者と、施肥のタイミング等の肥培管理について打合せを行い、生育状況の確認を行いながら管理しており、実需者ニーズを満たした品質の飼料用米生産に取り組んでいる。